

8 河道特性

鶴見川は近隣の多摩川や相模川と異なり山地帯を欠くことから、標高 80~170m の丘陵地帯の尾根線が上流域の分水界をなし、源流から恩田川の合流点に至る区間を、1/250 とやや大きめの平均河床勾配で流下し、その後、恩田川の合流付近から、標高が非常に低い沖積低地を、1/1000 以下と緩やかな勾配で、張り出す下末吉台地を避けるように蛇行しながら流下する。

なお、かつては著しかった下流部への土砂供給量も、流域の市街化の進行が鈍化し、その量は低減したため、図 8-4 に示すとおり、下流部の河床高には平成元年以降大きな変化を見せていない。

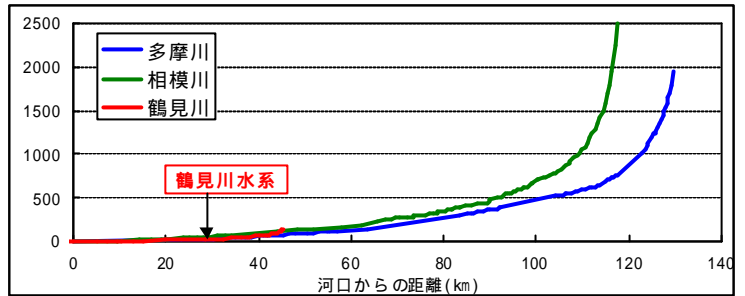


図 8-1-1 鶴見川と多摩川・相模川の縦断形状の比較

出典：京浜河川事務所



図 8-1-2 上・中・下流域の区分

出典：京浜河川事務所

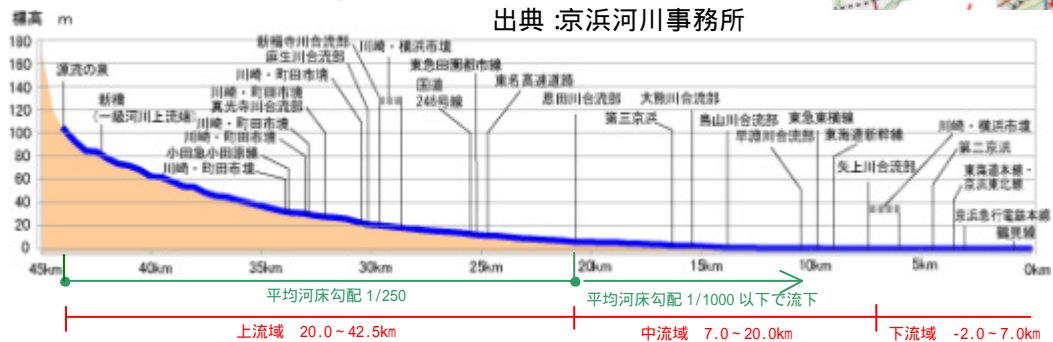


図 8-1-3 鶴見川河川縦断図

出典：京浜河川事務所

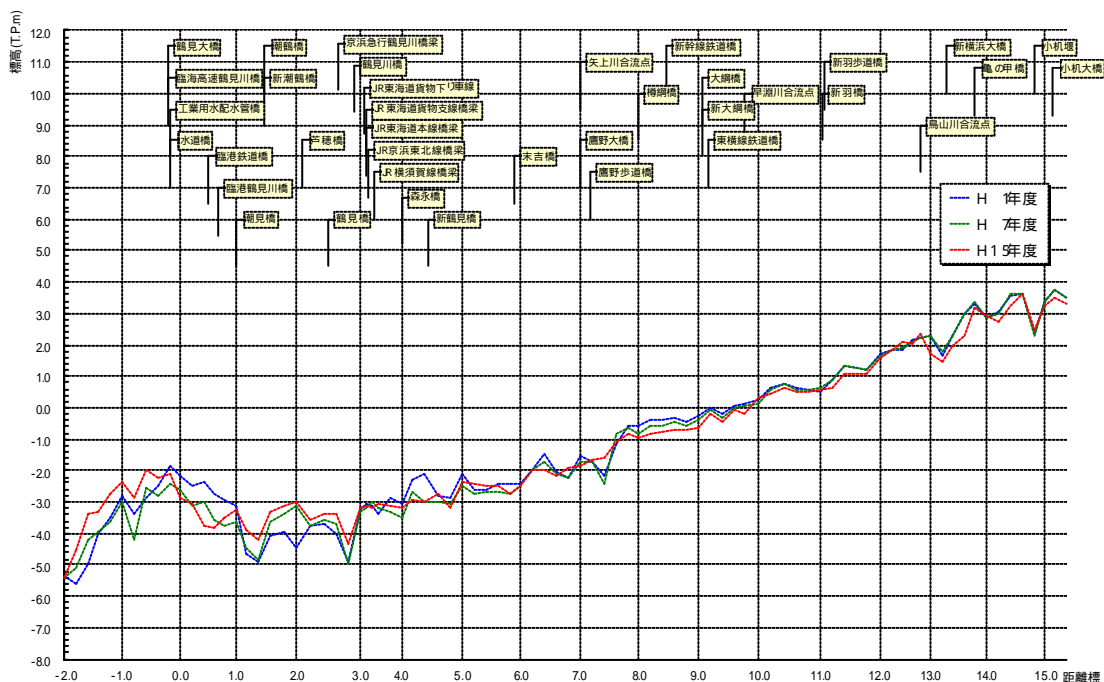


図 8-1-4 直轄区間 (-2.0km ~ 15.4km)における平均河床高の経年変化

出典：京浜河川事務所

(1) 上流域の河道特性【20.0km 地点より上流：指定区間】

上流域は、概ね河床勾配が 1/150 程度であり、河床材料は砂礫混じりである。

河道幅は概ね 3m ~ 25m であり、水面幅も河道幅の広がり応じて 3m ~ 10m 程度の幅となっている。



【25km 付近から上流の河道の状況】



水車橋付近 (29km 上流側)



桜橋付近 (39km 上流側)



寺家橋付近 (28km 上流側)



袋橋付近 (35km 上流側)



宮前橋付近 (26km 上流側)



下川戸橋付近 (33km 上流側)

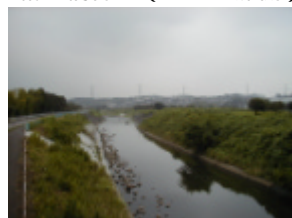
【30km より上流の河道の状況】



学校橋付近 (23km 上流側)



精進橋付近 (21km 上流側)



精進橋付近 (21km 下流側)



【20km 付近から上流の河道の状況】

写真出典 :京浜河川事務所

(2) 中流域の河道特性【 7.0km 地点～15.4km 地点：直轄区間】

【15.4km 地点～20.0km 地点：指定区間】

中流域は、概ね河床勾配が 1/1500 程度であり、河床材料はシルト～砂である。

河床勾配も緩やかになり、上流から運ばれた砂が蛇行部分や支川との合流部付近に堆積し、州が形成されやすい状態である。河道幅は概ね 100m～190m であり、水面幅も河道幅の広がりに応じて 60m～130m 程度の幅を持っている。

高水敷や場所によっては低水路河岸にも砂が堆積し、水生植物や水鳥を中心にした生物の生息・生育基盤を形成している。

【指定区間 20km 付近】



【指定区間 18km 付近】



【直轄区間 12km 付近】



【直轄区間 7km 付近】



写真出典 :京浜河川事務所

(3) 下流域の河道特性【河口～7.0km 地点：直轄区間】

下流域は、概ね河床勾配が水平～1/2700 程度であり、河床材料はシルトである。

河床勾配が非常に緩やかになり、全区間が汽水域の区間となっている。中流と比較して、砂の堆積が少ないことから、州等が発達していない。河道幅は概ね 140m であり、水面幅も河道幅の広がり応じて概ね 130m の幅を持っている。

【直轄区間 2km 付近】



【直轄区間 0km 付近】



【河口付近】



写真出典 :京浜河川事務所

【中流・下流域の河道の変遷】

かつては、田園地帯を蛇行しながら流下していたが、市街化及び水害防止のため、昭和 40 年頃からの河道改修に伴う「低水路の拡幅・直線化」、「護岸の設置」により、川幅がほぼ一定で単調な河道となった。

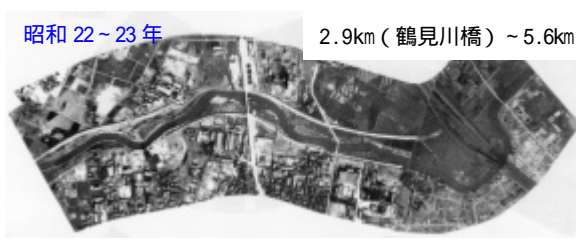
7.9km～10.6km

昭和 22～23 年

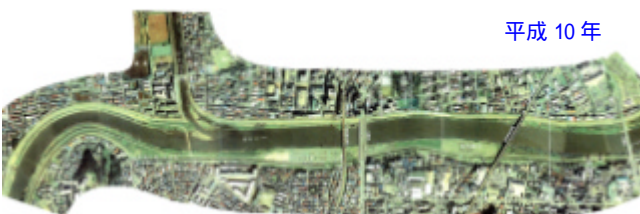


昭和 22～23 年

2.9km (鶴見川橋)～5.6km



平成 10 年



平成 10 年



写真出典 :京浜河川事務所